三重大学教育学部研究紀要　第67巻　教育科学　（2016）　287 － 292頁

4、5歳児におけるいざこざの第三者である子どもの介入行動の種類

吉田真理子・竹村　真菜

The classification of the third-party interventions in conflict situations in 4- and 5-year-olds.

Mariko YOSHIDA and Mana TAKEMURA

要　旨

本研究では、幼稚園の4歳児と5歳児を対象に、いざこざの第三者である子どもの介入行動について観察をおこなった。4歳児クラスと5歳児クラスをそれぞれ11回ずつ観察した結果、介入行動は11カテゴリ（「禁止・非難・注意」、「ルールの導入・判断」、「事実の確認」、「保育者への伝達・説明」、「身体的攻撃」、「同調・支持」、「制止」、「物の付与」、「保育者の存在を示唆」、「代替許可」「譲歩の促し」）に分類された。そして、4歳児よりも5歳児の方が、「同調・支持」「保育者の存在を示唆」が多く、反対に「ルールの導入」「保育者への伝達・説明」「身体的攻撃」が少なかった。

問　題

保育現場における子ども同士のいざこざは、少子化が進む昨今、友だち関係を学ぶ機会として重要だということは保育に携わる者の間ではほぼ共通の認識であろうと思われる。しかしその一方で、近年の保育現場では、子どもの怪我及びそれに対する保護者の理解への懸念から、いざこざを安易に容認できなくなってきている。すなわち保育者は、いざこざが人間関係を学ぶうえで欠かせないと理解しつつも、それを見守るということが難しくなっているのである。

このような現状では、子ども同士のいざこざがはじまると、怪我や事故が起きる前に保育者がすぐに介入することが求められる。しかし、実際のいざこざの様子をみてみると、保育者が介入しなくても、いざこざの当事者でない第三者の子どもが介入し、保育者のようにいざこざを仲裁する役割をしていることも少なくない。例えば、子ども同士のいざこざについて、4歳児を観察した越中（2001）や5歳児を観察した安田・日野林（2009）によると、葛藤・いざこざ場面の約4割で、子どもによる介入行動がみられたという。さらに、そのような行動は必ずしも特定の子どもに限ったことではないようで、越中の観察では、クラスの子どもの約7割が介入行動をしていた。以上の結果は、4、5歳児の多くが、友だち同士のいざこざを他人事として放っておくのではなく、何かしら関わろうとしていることを示唆しており、これは仲間意識の現れであるといえるのではないだろうか。そして、このような仲間意識を育むことは、クラスの集団づくりにおいて重要なことであると考えられる。

保育における集団づくりではこれまで、自治的な集団をつくることを目的として、個別に直接子どもにはたらきかける「直接的教育作用」と同時に、周囲の子どもたちにはたらきかけて集団が変革していくことによって個々の子どもが変わっていくことを意図した「間接的教育作用」が重視されてきた（諸岡, 2006）。このようなはたらきかけをいざこざ場面で考えると、保育者がいざこざに直接介入することは直接的教育作用に相当し、友だちのいざこざに介入しようとする第三者の子どもの行動を促したり見守ったりすることは間接的教育作用に相当するといえるかもしれない。そして、このような間接的教育作用を意識した働きかけ、すなわちいざこざに保育者がいつも介入するのではなく第三者の子どもが介入することは、保育者がいなくても自分たちで何とかしようとする自治的な集団の形成につながることが予想される。このような意味でも、いざこざの第三者である子どもの介入行動を促すことは、集団づくりにとって重要であると考えられる。

ただし、子どもの介入行動は常にいざこざの終結や解決につながるようなものだけではない。むしろ反対に、いざこざを助長させてしまう可能性の方が高いといえるかもしれない。介入行動の種類については、先行研究のなかでいくつかの種類に分類されており、例えば中川（2002）では、年長男児の介入行動を8つのカテゴリ、すなわち「制止・禁止・注意」「行動・状態の説明」「権威依存」「加勢」「反復」「話をそらす」「煽り」「無視・無言」に分類されているが、なかでも「加勢」（当事者のうちどちらか一方の味方になって一方を責める）や「煽り」（どちらの味方につくわけでもなく当事者の興奮を高める）は、いざこざをいっそう複雑にし得るだろう。加勢については越中（2001）もまた、観察した4歳児の介入行動をまず「中立型」と「加勢型」に大別した後、それぞれをさらに下位分類している。「加勢型」については11の下位カテゴリ（対加害者「言語的攻撃」「避難」「身体的攻撃」「禁止」「主張」「言いつけ」、対被害者「同意・支持」「追従」「許可・かばう」「援助行動」「慰め行動」）に分けられている。他にも、安田・日野林（2009）は、5歳児の介入行動を5つのカテゴリ（「連合」「中立」「保身」「なぐさめ」「不明」）に分類しており、その中の「連合」は“当事者どちらか一方の味方になること”と定義されていることから、中川や越中の分類でいう「加勢」に当たる。

以上のように、先行研究間で介入行動の分類はやや異なるが、ほぼ共通した結果として、いざこざの当事者のどちらか一方の味方につく介入行動（「加勢」や「連合」）が、幼児期の介入行動において最も多くを占めるようだということである。例えば、前述した越中（2001）では、「中立型」が11事例であったのに対し、「加勢型」は59事例もみられている。また中川（2002）や中川・山崎（2003）では、最も多い介入行動として「無言」と並び「加勢」がほぼ並んで占めている。さらに安田・日野林（2009）においても、「連合」が、介入行動111事例のうちの84事例と最も多くを占めている。

このように、幼児期の子どもは、いざこざの当事者どちらかの味方をして応戦するという介入の仕方が最も一般的なようである。それでは、このような介入行動のあり様は、年齢とともに変化するのだろうか。ケンカの事例を収集・分析した加用（1981）によると、当事者の一方に「意図的に加担」する子どもは、1〜2歳では0件であったのに対して、3〜4歳では6件、5〜6歳では10件であったことから、そのような行動は3歳以降に出現し、増加する傾向にあることが示唆されている。また、より詳細に介入行動の種類について4歳児と6歳児を比較した中川（2004）によると、4歳児で最も多かった介入行動は「傍観」（43%）であり、その次に「事実確認」と「加勢」（ともに29%）が続くのに対し、6歳児で最も多かったのは「事実確認」（21%）であり、その次に「提案」（18%）、あとは「加勢」（16%）、「制止・禁止・注意」（13%）、「傍観」（11%）、「代弁」「気持ちの確認」（5%）と続いた。このように、「加勢」が減少し、「提案」や「制止・禁止・注意」などが増加していることから、この結果は子どもが年齢とともにいざこざの終結・解決を目的とするような介入行動をより行うようになるということを示唆する。事実、子どもの介入行動が終結に結びつく割合について、年齢間で比較した研究（高木, 2000; 山口・香川・谷向, 2009）によれば、特に5歳くらいになると、それ以前よりも介入による終結率が若干高くなることが示唆されている。ただし、5歳児でさえ、解決・終結につながる割合はいざこざ全体のうち、山口・香川・谷向（2009）では5.7%、高木（2000）では19.0%と、2割にも満たない。けれども、介入行動の価値は、それがいかに終結・解決につながるかといった有用性の側面というよりも、そのような行動をするに至った仲間意識や友達関係の育ちにあるのではないだろうか。

保育所保育指針解説書（厚生労働省、2008）が示す人間関係の発達過程によると、「おおむね4歳」では主に自己と他者の葛藤や協調などが記されているのに対して、「おおむね5歳」および「おおむね6歳」になると、1対1の関係を超えて、集団や仲間の一員としての育ちなどが記されている。すなわち、5歳以降になると単に個々の友達関係だけでなく、集団としての仲間意識が高まることが示されている。その具体例の1つとしてあげられているのが、けんかを自分たちで解決しようとする姿である。ただし冒頭で述べたような現状をふまえると、今の保育現場では、子どもたちが解決しようとする前に大人がすぐ介入せざるを得なくなっていることが予想される。あるいは、前述したように、子どもの介入行動はその方略の未熟さから解決にまで至ることが少ないため、あまり重視されていないかもしれない。しかし、自分自身に利害関係がないにもかかわらず友達同士のいざこざに介入しようとする子どもの行動は、まさに個々の友達関係から集団へと関心がひろがりつつあることの現れとして重要ではないだろうか。それにもかかわらず、このような介入行動が幼児期を通していかに変化するのかについてはまだ実証的な証拠が数少ない。

そこで本研究では、いざこざに対する第三者の子どもの介入行動が発達とともにどう変化するのかについての観察を通して、仲間意識の育ちを明らかにする。対象児は、前述したように保育のなかで集団や仲間の

一員としての育ちが求められはじめる4、5歳児クラスの子どもとする。本研究の目的は、先行研究をふまえ、次の2点について明らかにする。第一に、介入行動のカテゴリの再検討である。先行研究における介入カテゴリの分類は一貫しておらず、また分類基準も具体的な言動レベルのものと介入行動の結果レベルのものが混在しており、カテゴリ間の階層が異なっている。例えば、越中（2001）は、「加勢」と「中立」を上位カテゴリにおき、その下位カテゴリとして「禁止」や「慰め」などのカテゴリを設けているのに対して、中川（2002、2004）は、それらを並列するカテゴリとしている。本研究では、「加勢」や「中立」というような抽象的なカテゴリは使用せず、できるだけ子どもの言動を明確に表すようなカテゴリに分類する。

第二に、介入行動の種類の年齢に伴う変化である。それに関する先行研究ではまだ数少なく、実証的な証拠を積み重ねる必要がある。そこで本研究では、前述してきたように第三者の介入行動と集団や仲間としての育ちは関係していると考えていることから、そのような育ちが求められる4歳から5歳にかけて介入行動の種類がどう変化するのかを明らかにする。

なお、本研究におけるいざこざの定義であるが、第三者の介入行動について調査した越中（2001）と同様、Hartup et al.（1988）による葛藤の定義「『①AがBに影響を及ぼそうと試みる→②BがAに抵抗する』という2ターン以上のやりとりによって成立するもの」に従うものとする。ただし本研究では、第三者による介入行動を対象とするため、単に何らかの意見や主張が食い違う「葛藤」というよりも、第三者が気付くような激しいけんかの要素が強いことから、「いざこざ」という言葉を用いることとする。

観察方法

対象児：三重県津市内にある幼稚園の4歳児クラス29名（男児14名、女児15名、平均年齢4歳9か月、レンジ4歳3か月－5歳2か月）、および5歳児クラス33名（男児14名、女児19名、平均年齢5歳9か月、レンジ5歳3か月－6歳2か月）であった。なお、平均年齢とレンジは観察開始時のものである。

観察期間：2011年の6月から11月まで（7月中旬から8月末までの夏休み期間を除く）、おおよそ週に1度ずつ両クラスを観察した。観察回数は両クラスともに計11回であった。

観察場面：クラスの子どもがそろいはじめる朝の自由遊びの時間（9時）から降園までの時間（午前保育の日は12時半、午後保育の日は14時半）であった。

観察方法：自然観察法における介入行動の事象見本法を基本とした。記録方法としてはメモとICレコーダーを使用し、それをもとにフィールドノーツを作成した。

記録内容は、いざこざが開始してから終了するまでを1つの事例として、いざこざの当事者及び第三者の子どもの名前と言動をメモによって記録し、後にICレコーダーで正確な言動を追加して、フィールドノーツを作成した。

なお、介入行動の定義は、「いざこざの非当事者である子どもが、いざこざの当事者（たち）に対して、自発的に関与しようとする言動」とした。

結　　果

観察された介入行動の事例数は、4歳児19事例、5歳児は21事例であった。本研究で観察された介入行動の数は、4歳児と5歳児で有意な差はなかった（$p=.87$, n.s.）。

介入行動の分類

事例の中でみられた一連の介入行動を言葉や行動の単位に分け、それらをいずれかのカテゴリに重複しないよう分類した。介入行動の種類は、先行研究（越中, 2001; 中川, 2002; 中川・山崎, 2003; 安田, 2009）をもとに一部改変し、計11カテゴリに分類された（Table 1）。すなわち、「禁止・非難・注意」、「ルールの導入・判断」、「事実の確認」、「保育者への伝達・説明」、「身体的攻撃」、「同調・支持」、「制止」、「物の付与」、「保育者の存在を示唆」、「代替許可」「譲歩の促し」である。カテゴリを改変する際には、先行研究のようにその介入行動が当事者一方の味方であるか否かというような基準を含むカテゴリ（「中立」や「加勢」）は用いず、できるだけ具体的な言動を明確に表すようなものにしてカテゴリの階層の差異を少なくした。また、先行研究にはなかった新たなカテゴリとして「譲歩の促し」を設けた。これは、単に当事者の言動を否定したり同意したりするものではなく、対立する両者が折り合いをつけられるようなものであるため、他のカテゴリには属さない独立したカテゴリであると判断した。

年齢別にみた各介入行動の具体例と割合

各介入行動の具体例とそれらがみられた事例数を年齢別に示す（Table 2）。なお、1つの事例の中で複数の種類の介入行動がみられた場合もあるので、カテゴリ間で事例の重複がある。ただし、1つの事例の中で同じ介入行動が複数回みられた場合、カウントは1回のみとした。

4歳児の介入行動は、「禁止・非難・注意」（42.1%）が最も多く、その次に「ルールの導入・判断」「事実確認」「保育者への伝達・説明」（いずれも21.1%）で

Table 1. いざこざに対する 4、5 歳児の自発的介入の種類

カテゴリ名		内　　容
①	禁止・非難・注意	口頭で、当事者の言動を差しとめたり、責めたり、気をつけさせたりする。
②	事実確認	いざこざの原因や事情について、当事者に聞いたり、確かめたりする。
③	ルールの導入	規則を取り入れた提案・判断・助言をおこなう。
④	保育者への伝達・説明	保育者にいざこざを知らせたり、説明したりする。
⑤	身体的攻撃	当事者に対して、手を出す等の身体を使った攻撃をする。
⑥	同調・支持	当事者の主張に賛成して、言動を繰り返したり、援助・提案したりする。
⑦	制止	行動で、当事者の行いを止めようとする。
⑧	物の付与	いざこざの争点となっている物を、当事者が得られるようにする。
⑨	保育者の存在を示唆	保育者の存在をほのめかすことによって、慰めたり、おどしたりする。
⑩	代替許可	当事者の一方に代わって、もう一方の要求を受け入れる。
⑪	譲歩の促し	当事者に、自分の主張を妥協したり相手の主張を聞き入れたりするよう促す。

Table 2. 年齢別にみたいざこざへの自発的介入行動の具体例と割合

カテゴリ名		具体例		事例数（%）[注1]	
		4 歳児	5 歳児	4 歳児	5 歳児
①	禁止・非難・注意	「あかんよー」、「けんかはやめなさい、おまえたち」、「とりあえずはなしたれよ」、「ばかっていったらあかん」、「おまえが悪い」、「ごめんって言っとけよ」、「べーっべーっ」、「手汚いから運ぶの無理やで」、「おまえがそんなところで作っとるからやん」、「幼稚園の子がそんなこというのおかしいよ」	「やめな」、「やめろー」、「○○組（3 歳児クラス）に戻るよ」、「人のこと聞きな」、「わーるいなー、わーるいな」、「～しとる方が悪い、なぁ？」、「順番は守らないとだめなんだよ」	8 (42.1)	11 (52.4)
②	事実確認	「どうしたの？」、「なにかしたん？」	「どうしたの？」、「（たたいたのは）あいつやな？」、「あたっちゃったの？」	4 (21.1)	3 (14.3)
③	ルールの導入	「じゅんばんこしたらいいやん」、「○人まで」「○○ちゃんのだよ」、「触ったのは○○くん」	「○○ちゃんが○○ちゃんの次なんだから」	4 (21.1)	1 (4.8)
④	保育者への伝達・説明	保育者に駆け寄る、「先生、泣いとるよ」、「あのね、○○ちゃんが聞きたかったのに、○○くんが取ろうとした」、「でも先にさわったのは○○くん」、「○○ちゃんが…」、「○○があそこでつくっとるからー」、「○○くんになぐられたって」	一方を保育者のところへ連れていく、一方がもう一方のお腹をたたいたことを説明	4 (21.1)	1 (4.8)
⑤	身体的攻撃	新聞製の金槌で頭をたたく、折り紙でたたく、たたく	たたく	3 (15.8)	1 (4.8)
⑥	同調・支持	「私も忙しいの」、「行こ」	「そうやで」、「じゃあ電車やろう」、「手伝う」と言って同様にエプロンをつけさせる、同様に帽子を下げる、「○○ちゃんとか入りたいよ」	2 (10.5)	6 (28.6)
⑦	制止	取り返そうとする、つかまえる	つかまえる、押さえつける、追いかけて殴る真似	2 (10.5)	2 (9.5)
⑧	物の付与	「あいたよ」と教える、ゆずる	自分のフラフープを渡す	2 (10.5)	1 (4.8)
⑨	保育者の存在を示唆	「先生に言った方がいいで。怒られるから」	「あとで先生に言うから大丈夫やで」、「先生に言うで」、「先生にゆったるからな」	1 (5.3)	3 (14.3)
⑩	代替許可	「なかまだから入れたる」	「チケットがあればいいよ」、「ともだちだから入れてあげる」、「やっぱいいよ」	1 (5.3)	2 (9.5)
⑪	譲歩の促し	「○○くんはいいやんか」	「もういいやん。やりたくないっていっとんのやし」、「どっちでもいいやん」	1 (5.3)	2 (9.5)

注 1：（　）内は、各年齢の総事例数（4 歳児 19 事例、5 歳児 21 事例）に占める割合（%）

あった。それに対して5歳児の介入行動は、最も多かったのは4歳児と同じ「禁止・非難・注意」（52.4%）であったが、その次に多かったのは「同調・支持」（28.6%）であり、その次は「事実確認」「保育者の存在を示唆」（14.3%）であった。4歳から5歳にかけて増加した介入カテゴリは、当事者の一方の味方をする「同調・支持」であり、4歳児は2件（10.5）であったのに対して、5歳児は6件（28.6）であった。また、その場にいない保育者の存在を出すことでいざこざをおさめようとする「保育者の存在を示唆」も、1件（5.3%）から3件（14.3%）へと増えた。反対に、4歳から5歳にかけて減少した介入カテゴリは、決まり事を相手に教える「ルールの導入」と「保育者への伝達・説明」で、いずれも4件（21.1%）から1件（4.8%）へと減少した。また、当事者に手を出してしまう「身体的攻撃」も、3件（15.8%）から1件（4.8%）へと減少している。

考　察

本研究の目的は、いざこざの第三者である幼児の介入行動の分類を再検討し、それらの年齢による違いを明らかにすることであった。その結果として、第一に、介入行動は11カテゴリ（「禁止・非難・注意」、「ルールの導入・判断」、「事実の確認」、「保育者への伝達・説明」、「身体的攻撃」、「同調・支持」、「制止」、「物の付与」、「保育者の存在を示唆」、「代替許可」「譲歩の促し」）に分類され、なかでも「譲歩の促し」は新たに独立したカテゴリとして設けられた。第二に、4歳から5歳にかけて「同調・支持」「保育者の存在を示唆」が増加するとともに、「ルールの導入」「保育者への伝達・説明」「身体的攻撃」が減少することが示唆された。

先行研究（越中，2001; 中川，2002; 中川・山崎，2003; 安田・日野林，2009）では、介入行動のなかでも当事者の一方に味方する「加勢」が最も多かったが、このようにはじめから子どもの言動を大人から見て加勢か中立かといった判断をすることは、公平に仲裁できないといった子どもの介入行動の方略の未熟さにばかり焦点が当てられかねない。また、介入行動の各カテゴリについて具体例があげられていることも少なく、具体的に子どものどのような言動が各カテゴリに分けられているのか明確でなかった部分がある。以上のことから、本研究において、各カテゴリを子どもの具体的な言動に基づいて実例とともに示したことは、今後子どもがどのような意図や考えで介入しようとしたのかといった子どもの視点を明らかにするための1つの手がかりになるのではないかと考えられる。

年齢による違いとしては、4歳児よりも5歳児の方が、保育者にいざこざについて直接伝えることが減り、保育者の存在をただほのめかすことによって慰めたりおどしたりすることが増えるのは、興味深い。これは、年齢とともにいざこざを自分たちで解決しようとするようになる姿の表れであるかもしれない。また、当事者への「同調・支持」が4歳児よりも5歳児で増えているのは、5歳児の方が、友達関係がより親密になってきているためかもしれない。これは、いざこざが当初の当事者を超えてより発展し得る可能性を示唆している。他にも、中川（2004）とは違って「禁止・非難・注意」のような否定的な発言が多く、いずれの年齢も約4割以上でみられた。ただし、以上の結果はいずれも、介入行動のデータがまだ数少ないため、発達というよりも、その園の考え方や保育方法、人数などのクラス条件といった要因も大きいと考えらえる。今後さらに様々な保育・幼稚園現場において実証的な証拠が積み重ねられる必要があるだろう。

なお、本研究で観察された介入行動自体の生起数は4歳児と5歳児とでほぼ差はなかった。中川（2004）では、いざこざのなかで介入行動がみられた割合は、年齢が低いほど小さかった。しかし、そもそもいざこざの生起数自体が年齢によって異なり得るため、割合としては年齢が低いほど小さいかもしれないが、生起数自体はそれほど変わらない可能性がある。これについても更なる調査を期待したい。

引用文献

越中康治．（2001）．幼児の対人葛藤場面における第三者の行動．広島大学心理学研究，193－217.

Hartup, W. W., Laursen, B., Stewart, M. I., & Eastenson, A. (1988). Conflict and the friendship relations of young children. Child Development, **59**, 1590－1600.

加用文男．（1981）．幼児のケンカの心理学的分析．現代と保育，**7**，176－189.

厚生労働省．（2008）．保育所保育指針解説書．フレーベル館：東京.

諸岡康哉．（2006）．集団づくりの本質とは何か．全国保育問題研究協議会（編），人と生きる力を育てる：乳児期からの集団づくり（pp 42-50）．新読書社：東京.

中川美和．（2002）．支配関係の異なる相手に示す幼児の介入行動．広島大学大学院教育学研究科紀要，**3**，365－373.

中川美和．（2004）．4、6歳児の対人葛藤に対する保育者と幼児の介入行動：誠実な謝罪につながる介入行動．広島大学大学院教育学研究科紀要，**3**，325-332.

中川美和・山崎　晃．（2003）．対人葛藤場面における幼児の介入行動の変化：問題解決方略との関連．幼年教育研究年報，**25**，27－34.

高木香織．（2000）．保育所における子どものトラブルの発達

的変化：トラブルの内容や解決方法の発達と保育者の働きかけについて．教育福祉研究，26，33－43．
山口優子・香川　克・谷向みつえ．（2009）．保育園児のいざこざプロセス．関西福祉科学大学紀要，13，247－260．
安田　純・日野林俊彦．（2009）．他児のいざこざへの保育園児の介入行動．大阪大学大学院人間科学研究科紀要，35，99－117．

付　記

本論文は、第一著者の指導のもとで執筆された2011年度三重大学教育学部卒業論文（竹村真菜「トラブルの終結からみた幼児の仲間関係：第三者のトラブルへの関与に注目して」）の一部を再分析し直したものである。